

# 宇宙玩具『別物語』についての覚書

## The Note of TACO “BETSUMONOGATARI”

角 田 達 朗  
Tatsuo SUMIDA

キーワード：演劇、公演、創作

2017年7月、筆者を代表とする演劇企画集団・宇宙玩具（TACO）は『擬態 MODOKI』と題する公演を行った。この公演は「演劇創作作品の上演における表現方法の研究」という研究課題を掲げて本学の研究助成を受けた。本稿は、この研究課題のための脚本執筆を振り返り、所見を記すものである。

\*

公演の宣伝チラシに載せる案内文に以下のように書いた。

突然ですが、人間の性愛って、どうしてこんなにややこしいんでしょう？

「新たな生命を生み出す尊い営み」とか言われて神聖視されるのに、その行為や器官を直接的に描けば「猥褻」と卑しまれてしまいます。そうやってタブー化されて日の当たらない所に隠されているかと思えば、結婚とか出産とかは「晴れ」、つまり直射日光ガンガンだという……。

しかも、タブーにも二面性があって、性産業とかポルノ・コンテンツとか、「日陰の花」が卑しまれつつ盛大に咲き誇っていたり……。どうして人間の性愛って、こんなにねじれた社会化をされるんでしょう？

それが全部社会のせいならともかく、自分の中にもねじれの根っこがある気がするので何ともはや。

今回はそんなモヤモヤを形にするべく脚本を書きました。

また、公演パンフレットに載せる挨拶文には以下のように書いた。

今からちょうど十年前、当時厚生労働大臣だった柳澤伯夫という人が女性を「産む機械」と表現して物議を醸しました。改めて調べてみると、柳澤氏は「機械って言っちゃって申し訳ない」とか「機械って言ってゴメンナサイ」とか、繰り返しおわびの言葉を差し挟んでいたそうです。そんなふうには断るわけだから、良くない表現だという自覚はあったはず。それなのに、なぜあえてそんな表現をしたのか……そうせずにいられない何かが柳澤氏の中にはあったのでしょうか、私には全く測り知れません。しかし、私はわからないことをそのまま放置するのが苦手です。我ながら因果な性分だと思いますが、気になってしまうものは仕方ありません。そこで、今回は「女は産む機械だ」という発想にあえて接続することを試みました。その発想のもとでこの世界を見ると、いったいどんなふうに見えてくるのでしょうか。

案内文では性愛の社会化のねじれに言及し、挨拶文では性愛の社会化の中でも少子化を問題視する政治的言説に焦点を当てたわけである。柳澤氏のいわゆる「産む機械」は良くも悪くも比喩の域を出るものではないが、そのような比喩化の中に、筆者はねじくれたものを感じ取ったのであった。

今年の7月にも、自由民主党所属の衆議院議員・杉田水脈氏が『新潮 45』2018年8月号に寄稿した『「LGBT」支援の度が過ぎる』と題する文章で批判を浴びた。中でもその差別性を端的に示すものとして盛んに取り沙汰されたのが、以下のくだりである。

LGBTのカップルのために税金を使うことに賛同が得られるのでしょうか。彼ら彼女たちは子供を作らない、つまり「生産性」がないのです。そこに税金を投入することが果たしているのかどうか。

子を産むことを「生産性」と表現する発想は、言うまでもなく女性を「産む機械」と表現するのと同様である。そこには性愛を機械の運動のように捉えようとする、奇妙に乾いた感覚がある。子を産むことを公的支援の絶対条件であるかのように言い立てる論旨そのものはもちろんのこと、その表現の乾き具合もまた非難的になったのだった。

溯れば、『週刊女性』2001年11月6日号に当時東京都知事だった石原慎太郎氏の以下の発言が掲載されて、物議を醸している。

“文明がもたらしたもっとも悪しき有害なものはババア”なんだそうだ。“女性が生殖能力を失っても生きてるってのは、無駄で罪です”って。“男は80、90歳でも生殖能力があるけれど、女は閉経してしまったら子供を産む力はない。そんな人間が、きんさん、ぎんさんの年まで生きてるってのは、地球にとって非常に悪しき弊害だ”って……。

石原氏はこれを、松井孝典東京大学大学院教授（当時）の発言の引用だとしている（平成13年度東京都議会会議録 第16号）が、当の松井氏は後に『自然と人間』2003年2月号で「石原氏の発言を見ると、私の言っていることとまったく逆のこと」とコメントとしており、松井氏の発言を曲解した上での自説の開陳というのが正確な所である。

ここにも柳澤氏や杉田氏の言説と共通するものがある。性愛を機械の性能のごときものとして単純化し、人間の存在理由を性能の有無によって割り切ろうとする態度である。ややこしさやねじれを度外視するこうした言説こそ、実は最もねじくれたものと言うべきである。

＊

性愛をあたかも機械の性能であるかのように単純化する政治言説を、劇中には、総理大臣による以下の三つの記者会見という形で取り込んだ。

伊保首相「今日、我が国は、深刻な危機に直面しています。それは、少子高齢化に起因する社会保障崩壊の危機です。このまま少子高齢化が進展すれば、国力は衰退の一途を辿り、年金・健康保険を初めとする、ありとあらゆる公的社会保障制度が完全に崩壊してしまう。これが現実です。私たちはこの厳しい現実から目を背けることはできません。こうした危機を回避することが、今、私の内閣に課せられた最大の使命であります。この国の社会保障制度を将来にわたって維持していく。そして、国民の命と暮らしを守り抜く。この決意の下、本日、

我が国の繁栄と国民の幸福追求を確かなものとするための法整備について、閣議決定致しました。

それは、非配偶者間の人工授精によって生まれた子ども、ならびに、代理母出産によって生まれた子どもについて、出生届を提出した夫婦の嫡出児と認めることです。これまで我が国では、実態としては第三者による精子提供が行われ、すでに一万人以上の子どもが生まれています。非配偶者間の人工授精に関する法律上の規定が存在しませんでした。また、第三者の卵子提供による出産、ならびに、代理母出産は一例も行われていません。日本産科婦人科学会が、法整備が行われていないことを理由に、これらを認めてこなかったからです。精子提供は認めているにもかかわらずです。精子はよいが卵子はいけないというのは、率直に申し上げて男女差別であると言わざるをえません。このような、理不尽な不平等を解消し、より多くの国民に、子どもを持つ幸福を味わって頂きたい。国民の産む権利を拡充したい。この強い思いから、私は卵子提供と代理母出産を認めることを決断致しました。」

質問者「夕日新聞の朝日山です。今回の閣議決定に対しては『恩恵を被る者はごく少数であって、これを少子化対策と呼ぶのは無理がある』との批判があるわけですが、これについて、総理はどのようにお考えでしょうか？」

伊保首相「もちろん、そうした声があることは、私も承知しております。しかしですね、子どもを産み育てるための環境整備については、財政的に可能な限り、すでに手を尽してきたと言っても過言ではないわけです。そもそも我が国の出生率・出生数を直接に改善できるのは、政府ではありません。国民一人一人の意識なのです。今後は、たとえ直接的な受益者は少数に止まるとしても、子どもを産む喜び、子どもを育てる幸せを、少しでも多くの国民に味わって頂く。そのことが周囲の人々に好影響を与え、子どもを産み育てようという気運が高まっていく。そうした波及効果に期待したいと思うのです」

付言すれば、筆者自身も精子提供のみが認められ、卵子提供が認められない現状はやはり不合理だと考える。ただし、卵子提供による出産や代理母出産のみならず、精子提供による出産にも倫理性の点で疑問に感じる所もある。これについては後述する。

伊保首相の釈明に関して言えば、「財政的に可能な限り」という所が曲者である。公的資金の配分を決定するのはまさに政治の責任なのであるから、少子化対策が財政上限界に達しているという釈明は政治責任の放棄にほかならない。

なお、この作品の時代設定は「西暦にすれば二〇二五年くらい」であり、伊保首相が第三者からの精子提供による出産について「すでに一万人以上の子どもが生まれています」というのも、そのような時代設定における創作である。

伊保首相「本日、国民の産む権利を更に拡充し、我が国の繁栄と国民の幸福追求をいっそう確かなものとするための新たな法整備について、閣議決定致しました。

それは、人工子宮の移植を、男性・女性を問わず支援することです。これまで私の内閣では、生殖医療における先進的な取り組みを、継続的かつ強力にバックアップして参りました。

その甲斐あって、人工子宮の開発が飛躍的に進展し、すでに実用段階に入っています。今後はこの成果を活用し、妊娠困難な女性はもとより、妊娠・出産を望む男性に対しても、移植を支援して参ります。これもひとえに、妊娠・出産を望むすべての国民に、産む権利を保証したい。一人でも多くの国民に、子どもを産む喜びを味わってほしい。この強い思いからであります。なお、人工子宮の移植を受けた男性の戸籍については、性的マイノリティにも配慮して、そのまま男性でいるか、女性に変更するかを、本人の希望に沿って選択できるものと致します。」

質問者「毎月新聞の日々野です。今回の閣議決定に対しては『男女の区別を曖昧にするものであって、倫理的に問題がある』との批判があるわけですが、これについて、総理はどのようにお考えでしょうか？」

伊保首相「我が国に今必要なのは、未来を絶望から希望へと変えてゆく勇氣です。加えて、男女の区別は固定されているべきだという、旧来型の価値観ゆえに苦しんでいる、性的マイノリティの皆さんがいらっしゃることにも、十分配慮しなければならないと私は考えます。そのために倫理が妨げになるのであれば、倫理も新しいものに変えてゆけば良いではありませんか。私はあえて問いかけたい。大切なのは、古い倫理にしがみつ়くことですか？ それとも国民の幸せを増進し、この国の未来を守ることですか？」

具体的な施策に限れば、伊保首相がここで提起するものに筆者は異存がない。技術的に可能であるなら、希望者には性別を問わず人工子宮を移植すれば良いし、移植を受けた男性が戸籍の性別を女性に変更可能であるのも望ましいと考える。

伊保首相の言説の難点は、人工子宮の移植を受けるか否かという個別の（換言すればマイクロな）選択を、「我が国の繁栄」「この国の未来を守る」というように、国というマクロなレベルに直結する所にある。これでは、移植を受けない選択をする余地は事実上閉ざされかねない。

伊保首相「本日、国民の産み育てる権利を一段と拡充し、我が国の繁栄と国民の多様な幸福追求を実現するための新たな法整備について、閣議決定致しました。これを先の二つの決定と合わせ、『少子化対策、新三本の矢』と命名したいと思います。

今回決定したのは、民法の現行規定を改正し、選択的一夫多妻制を導入することです。これまで少子化対策のための有識者会議において、多くの専門家にお集まり頂き、綿密かつ周到な議論を積み重ねて参りました。その過程で、少子化対策を実効化する上での重大な阻害要因が浮き彫りとなりました。それは、女性はいったん妊娠すると十月十日の間妊娠できないという、あまりにも明白な生物学的事実だったのです。一方、男性の生殖機能にはそのような物理的制約は存在しません。女性が妊娠によって事実上生殖困難な状態にある期間も、男性は生殖活動を行うことが可能です。このような、男女の生殖機能における非対称性を、合理的な方法によって埋め合わせること。それこそが少子化対策の急務であることが、明らかになったのです。

それでは、その合理的な方法とは何か。その答えは、一夫多妻制の導入を措いてほかにあ

りません。これは単純かつ明瞭な真実なのです。もちろん、だからと言って、全ての国民に一夫多妻制を採用して頂くことなど、できるはずもありませんし、するべきでもありません。要は、一夫多妻という夫婦関係、家族関係を望まれる方々が、それを享受できるようにしたいのです。様々な場面で多様性の尊重が唱えられる今日、愛の形も多様であって良いはずです。国民の幸福追求の形においても、多様な選択肢を提供したい。そして、より多くの子どもを持ちたいと望む全ての国民に、その権利行使のための、より多くの機会を保証したい。この強い思いから、私は選択的一夫多妻制を導入することを決断致しました。」

質問者「日中新聞の中日です。今回の閣議決定に対しては『女性蔑視』との批判があるわけですが、これについて、総理はどのようにお考えでしょうか？」

伊保首相「一部の野党からは、そのような声もあがっています。彼らは現在政府が用意している改正案に対し、『お妾法案』だなどと不当な歪曲を行い、神聖な議論の場である国会において、むやみにプラカードを並べて騒ぎ立てるばかりで、対案の一つも出そうとはしません。これがこの国の未来に責任を持つ態度と言えるでしょうか？ 国民の幸福追求に資する結果を生むでしょうか？ 私はそうは思いません。先程から申し上げます通り、今回の決定は、国民の多様な幸福追求を可能にするためのものです。決して一夫多妻を望まない方にまで無理強いするものではありません。『女性蔑視』などというレッテルは、全く無責任な、的外れなものに過ぎません。」

質問者「書買新聞の読売です。これでいよいよ少子化対策の新しい三本の矢が出揃ったわけで、国民の期待も非常に大きいと思いますが、総理はこの三本の矢によって、どのくらいの効果が上げられるとお考えですか？」

伊保首相「この三本の矢によって、少子高齢化の流れに歯止めをかけ、誰もが生きがいを感じられる社会を創る。国民総活躍の未来を切り開くため、大きな一歩を踏み出す。この強い決意を国民に示すことができました。そもそも子どもを産みたいという気持ちは、私たちの生命に刻印された健全な本能であり、大多数の国民が共有しているものである。私はそう確信しています。国民の産む権利を拡充し、多様な幸福追求を可能にすることによって、子どもを産み育てる輪が広がっていく。そうした好循環が起これば、我が国は必ずや繁栄を取り戻すことでしょう。希望を捨ててはいけません。」

伊保首相は一つ目の記者会見では、精子提供のみが認められている医学界の状況を「男女差別」「理不尽な不平等」と非難することで、卵子提供と代理母出産とを解禁することを正当化していたが、もしも本気でそのような所まで男女平等を徹底するべきと考えるなら、選択的一夫多妻制のみを導入することはできないはずである。彼は「様々な場面で多様性の尊重が唱えられる今日、愛の形も多様であって良いはずです」「国民の多様な幸福追求を可能にする」とも言うのだから、尚更である。彼にとっては男女平等も、二つ目の記者会見で持ち出した性的マイノリティへの配慮も、政府が打ち出す施策を善なるものに見せかけるための粉飾手段に過ぎないわけである。

要するに、伊保首相は少子化対策のためにいかに国民に効率よく子を設けさせるかしか考えてい

ないのであって、その思考の根にあるのが「そもそも子どもを産みたいという気持ちは、私たちの生命に刻印された健全な本能であり、大多数の国民が共有しているものである」という、およそ多様性など歯牙にも掛けない至極単純な人間観・性愛観なのである。

\*

この作品の主人公は太郎と花子という夫婦であるが、太郎が無精子症であるがゆえに子がいない。花子は伊保首相の一つ目の記者会見をたまたまテレビで見たことにより、第三者からの精子提供による妊娠を望むようになる。そのことをめぐって夫婦間で交わされる会話を、以下に抄出する。

花子「日本でもできたんだね。何で先生教えてくれなかったんだろ」

太郎「……そりゃあ、倫理的にノー・プロブレムとは行かないからだろ？」

花子「倫理的？」

太郎「モラルの面でってこと」

花子「わかってるよ」

太郎「……あのさ、考えてもみなよ」

花子「何を？」

太郎「わかんないかな？ だって、他人の精子だよ、赤の他人の」

(中略)

花子「太郎君にとって、子どもってそんな程度のものなの？」

太郎「……だったらさ、養子をもらえばいいよ。それなら平等じゃん」

花子「養子はいいいんだ？」

太郎「えっ？」

花子「養子をもらうのはいいのに、なんで精子をもらうのはダメなの？」

太郎「だからさあ……なんでわかんないかな？」

花子「だってさあ、夫の精子と妻の卵子で子どもができれば、百パーセント二人の子どもなわけでしょう？ それで言うと、養子は一パーセントも二人の子どもじゃないけど、誰かの精子をもらって子どもを産めば、五十パーセントは二人の子どもなんだよ」

(中略)

太郎「(ため息をついて) 誰かの精子で出来る子どもは、百パーセント君の子どもだよ。一パーセントも僕の子どもじゃない」

花子「だから、二人にとっては五十パーセントなんじゃん」

太郎「そうじゃないだろ」

花子「なんで？」

太郎「あのさあ」

花子「(太郎が言葉を継ぐのを待つが、何も言わないので) どうしたの？」

太郎「どこの馬の骨とも知れない奴の精子が、君の体に入って、君の卵子とくっついて、子どもが出来て……そんなの、君が浮気して子どもが出来るのと同じことじゃん」

花子「そんなことないよ」

太郎「あるよ」

花子「ないよ。だってセックスするわけじゃないんだよ」

太郎「だけどさあ」

花子「それが同じだって言うなら、養子をもらうのも子どもを誘拐してくるのも、同じってことになっちゃうって」

太郎「話が飛躍し過ぎ」

花子「そうかなあ？」

太郎「そうだよ」

両者の対立する主張のいずれかを正しいものとして選択することは、容易ではあるまい。太郎は、生殖という営みを日常のかつ身体的に経験し得る領域において捉え、素朴な感情に基づいた主張をするのであるが、花子はそれを「セックスするわけじゃないんだよ」とあっさり退けてしまう。ここにあるのは、生命科学の進展による倫理の空洞化である。経験における素朴な実感は倫理の一つの基盤であるが、生殖が性交と切り離されることによって、素朴な実感が必ずしも通用しない曖昧な領域が生まれている。それは倫理の内実の少なくとも一つを欠落させるという意味で、空洞化と呼ぶべき自体である。

ちなみに、同様のことは iPS 細胞についても言える。

ES細胞は代表的な多能性幹細胞の一つで、あらゆる組織の細胞に分化することができます。(中略)しかし、ES細胞は、不妊治療で使われず廃棄予定の受精卵を用いるものの、発生初期の胚を破壊して作るため、子になる可能性を持った受精卵を壊すことに抵抗感を持つ人々も少なくなく、ES細胞研究に対して厳しい規制をかける国も少なくありません。このような状況下では、研究目的といえども、ES細胞を作製することが容易ではありません。(中略)このような問題を回避する多能性幹細胞の作製方法が世界中で研究されていましたが、山中教授のグループは2006年にマウスの、2007年に人間の皮膚細胞からiPS細胞の樹立に世界で初めて成功したと報告しました。(中略)ES細胞に似た、様々な組織や臓器の細胞に分化することができる多能性幹細胞ができました。これが2006年に世界で初めて報告されたマウスiPS細胞の誕生です。

(京都大学 iPS 細胞研究所 CiRA「もっと知る iPS 細胞」

[https://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/faq/faq\\_ips.html](https://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/faq/faq_ips.html))

要するに、iPS細胞を生み出した思考は、人間の受精卵を破壊することには倫理的に問題があるが、受精卵そっくりの物を作って同じことをするなら問題ない、というものである。

しかし、「本物はいけませんが、そっくりの物ならよい」という考え方は、果たして十分倫理的と言えるであろうか。もし仮に人間そっくりの生命体が眼前に現れ、科学者から「人間そっくりなだけで人間ではないから、殺しても構いませんよ」と唆されたとしても、筆者はこれを殺すことに大変な後ろめたさを感じずにはいられないであろう。このように、科学技術の進展は、時として倫理

を素朴な感情から切り離して理屈だけのものにしてしまうのである。あるいは、科学技術を進展させるのに好都合なように、倫理が技術本位のものに変質させられていると言ってもよからう。

上記の会話において、筆者は生命科学の進展が倫理を空洞化させるという問題提起をするとともに、理屈だけの倫理を鏡として人間の性愛のややこしさを示すことも意図していた。ただし、ここでは花子を理屈だけの倫理を語る者、太郎をそれに抵抗して性愛のややこしさを示す者というような対立関係に置いたため、ここだけを見れば、図式的になり過ぎた嫌いは否めない。しかし、花子がここで技術本位の理屈を抵抗無く受容していることは、その直後に花子の存在が劇的な変容を被ることの伏線にもなっている。これについては後述する。

\*

性愛のややこしさについて、単純な対立の図式に収まることなく提示できた箇所があるとすれば、以下の、太郎による回想と、それに続く独白であろう。

太郎「花子さん、僕に何か隠し事してない？」

花子「えっ？ ……何の話？」

太郎「見ちゃったんだ」

花子「……何を？」

太郎「花子さんが見知らぬ男とホテルから出てくるとこ」

花子「……いつ？」

太郎「今日。営業回りで隣町に行った帰り」

花子「……そんなの、人違いに決まってるじゃん」

太郎「僕が君を見間違えると思う？」

花子「……そんなこと、わかんないじゃん」

太郎「そりゃあ、僕だって自分の目を疑ったけどね」

花子「……」

太郎「だけど、君のその顔、君のその服。……間違えようがないじゃん」

花子「……」

太郎「いつから？」

花子「えっ？」

太郎「いつから、ああいうことになってるわけ？」

花子「……三年くらい前からかな」

太郎「そんなに？」

花子「あ、でも、今日の人とは、今日が初めて」

太郎「えっ？ どういうこと？」

花子「……初めてって言うか、最初で最後」

太郎「だから、どういうこと？」

花子「……知らない人としか逢わないことにしてるの。だから、一度逢ったら二度と逢わない」



太郎「じゃあ何？ この三年間、知らない男と取っ替え引っ替えやってたってこと？」

花子「ごめんなさい」

太郎「謝って済む問題じゃないだろ」

花子「ごめんなさい」

太郎「どうしてそんなことを」

花子「……」

太郎「僕に不満があるなら、言ってくればいーだろ」

花子「そうじゃない。そういうことじゃないんだよ」

太郎「じゃあ、どういうことなんだよ」

花子「……自分の中に、どうしようもなく正しくないものが巣くってるの。自分ではそれをどうすることもできないの」

太郎「何だよ、それ」

花子「そんなことしちゃいけないって、頭ではわかってるのに、正しくないことをせずにはいられないの」

太郎「意味わかんないよ」

花子「自分の中に、どす黒い穴がポッカリ空いてて、時々その穴がジリジリ焼け付くように熱くなって、どうしても我慢できなくなって……知らない人から求められて、お金もらって。その時だけなんだ、カラッポな自分が満たされた気になれるのは」

太郎「金をもらってるわけ？」

花子はうなづく。

太郎「それ、体売ってるってことじゃん。わかってる？」

花子は再びうなづく。

太郎「どうして……そりゃあ、僕の稼ぎは確かに少ないよ。君がパートで稼ぐ分と合わせても、そんなに余裕はない。でも、だからって——」

花子「そうじゃない。お金が欲しいわけじゃないの」

太郎「だって、金をもらって、それで満たされるって」

花子「そういうことじゃないんだよ」

太郎「わかんないなあ」

花子「知らない人に抱かれて、お金もらって、『ああ、まだ自分にもそれだけの値打ちはあるんだな』って、そう思って、何て言うか、ちょっとホッとするの」

太郎「何でそんなことでホッとするんだよ。君の値打ちって、そんなことで決まるのかよ」

花子「わかんないよ。なぜだかホッとしちゃうんだよ、人から求められることにも、お金もらえることにも」

太郎「パートで働くのだって、君が必要とされてるってことだし、それでお給料ももらえるんだし」

花子「じゃあ、何でパートで働くのがよくて、男の人と逢うのはいけないの？」

太郎「何それ、そんなこともわからないの？」

花子「わかるように教えてよ」

太郎「何でだよ。そんなの常識だろ？」

花子「常識とかじゃなくて、太郎君の言葉で、私にもわかるように教えてよ、お願い」

太郎「はあ？」

花子「わかるように教えてくれて、それで私の中に、こう、ストーンと腑に落ちたら、正しくないことをやめられるかもしれないから」

太郎「そんなこと言われても」

花子「……パートで働いてたって、自分を汚してるっていう後ろめたさがないんだよ」

太郎「そんなの、あるわけないじゃん」

花子「だから、何か小綺麗で、ウソ臭くて、リアルじゃないんだよ」

太郎「君のやってることを一言で何て言うかわかる？『不潔』って言うんだよ」

花子「……太郎君、私が気づいてないと思ってるよね？」

太郎「何の話？」

花子「私に内緒で、たまに風俗行ってるでしょ？」

太郎「……君が売春するのと、僕が風俗行くのとじゃ、意味が違うよ」

花子「どう違うのよ？」

太郎「男には男の付き合いってものがあるんだ」

花子「何それ？」

太郎「誘われれば断れないってことだってあるんだよ」

花子「そんな簡単なことなの？自分を責めたり悩んだりしないの？」

太郎「男と女は違うんだって」

重苦しい沈黙。

花子「私、子ども産みたい」

太郎「は？何だよ突然」

花子「ね、子ども作ろうよ」

太郎「何で今そういう話になるかな」

花子「この体の中に命が宿って、この体の中で育って、この体から生れてくる。それってやっぱりすごい神秘だと思うんだよ。それほどすごい神秘なら、自分の中の空洞を埋められるんじゃないかって」

太郎「……あのさあ、子どもは君のメンタルを守るための盾じゃないんだよ」

花子「それに、子どもを育てるっていう大きな目標ができれば、こんな私だって、きっともって前向きに生きられると思うんだよ」

太郎「だからさあ」

花子「ね、お願い！このままじゃ、私たちダメになっちゃうよ」

太郎「そんなふうには言われなくたって、これまでだって、することはしてきたじゃん」

花子「だけど、子どもは出来なかった」

太郎「だから？」

花子「お医者さんに診てもらおうよ。それで、もし治療が必要なら、ちゃんと治療しよう。だって、もう結婚して六年になるんだよ。なのに子どもが出来ないって——」

太郎「だけど、僕はもう知ってしまったんだよ、君が、僕に隠れて何をしてたか」

花子「……じゃあ、離婚する？」

太郎「……君はそれでいいのか」

花子「こんな女だもん、君がもう愛情を持ってないって思うなら、仕方ないよね」

太郎「ああ！（と頭を抱えてうなだれる）」

少しの間後、太郎はガバッと顔を上げる。

太郎「また同じ夢か」

太郎はゆっくり立ち上がって花子と向き合う。

太郎「あの時、僕は嘘をついた。僕が風俗に行ったのは、人に誘われた時だけじゃない。それはきっかけに過ぎなかった。けばけばしく怪しげな世界に足を踏み入れる、ドギマギとドキドキの入り交じった不思議な感覚が、僕は忘れられなくなってしまったんだ。何て言えばいいのかな、そこでしか吸えない独特の空気のようなもの、僕はその空気を吸うことで、束の間息を吹き返すような気がした。……君はいったいどんな気持ちで見知らぬ男たちに体を委ねていたんだろう。やっぱり君も、そこでしか吸えない空気を吸っていたのか。……皮肉なものだね。あの時言えなかった言葉が、君がこんなふうになってしまったら、スラスラ口から出てくるなんて」

ここでは、少なくとも花子と太郎がそれぞれに性愛のややこしさと、そのねじれた社会化に足を取られてあがいていることは提示できたのではないかと思う。

太郎の独白の末尾に「君がこんなふうになってしまった」とあるが、これは花子が清涼飲料水の自動販売機に変容してしまったことを意味する。これについて、以下に述べる。

＊

花子はテレビで伊保首相の一つ目の記者会見を見、更に以下のCMを見た後に、自動販売機になる。

女1「早く子どもを産みたいけど、生理が不順だから排卵日が分からなくて」

女2「忙しくて病院に通う時間も取れないし、それに痛い注射も嫌だわ」

男「と、こんなお悩みをお持ちのあなた、あなたに耳寄りなお知らせです。いつでもどこでも手軽に飲める、簡単便利な排卵誘発剤、キットハラーム・エース！」

女2「今、『飲める』って言いました？」

男「そう、飲めるんです！」

女2「じゃあ、痛い注射を我慢しなくていいのね？」

男「いいんです！」

女1「でも、そんなので、ちゃんと効くのかしら？」

男「ご安心ください。医療用成分配合で、効き目は厚生労働省のお墨付き。キットハラーム・エースなら、あなたの思うがままに排卵できるんです！」

女1・2「すごーい！」

男「しかも、本日中にお電話くださった方には、特別価格でのご奉仕！ 通常価格、一箱五万円のところ、もう一箱お付けして、何と！」

女3「32,424円。32,424円」

男「サアニンシンニンシン、サアニンシンニンシンでのご提供です」

女3「あなたも今すぐお電話を！」

♪何でも流通させますう 丸玉流通センター

この直後、花子はふらりと立ち上がり、そのまま自動販売機になる。自動販売機に込めた象徴的な意味は、以下のように表現した。

太郎は花子に歩み寄り、財布から小銭を取り出して硬貨投入口に入れる。

花子「イラッシャイマセ。何ニナサイマスカ？」

太郎「こうして僕が君に挿入する。そして（と、商品を選択してボタンを押す）」

缶入りのドリンクが取り出し口に落下するガラガラドスンという音がする。

太郎「僕の望む通りに、君が産み落とす（と、ドリンクを取り出し）もしかして、これこそが僕たち夫婦の理想の形だったんじゃないか。ふとそんなことを思って、空恐ろしくなることがあるよ」

花子「毎度アリガトウゴザイマス。マタノゴ利用ヲオ待チシテオリマス」

花子自身の「産みたい」という内圧と、「産ませよう」という社会的な外圧がぴったり一致した結果、文字通りの「産む機械」となったわけである。

太郎は何かして花子を元に戻したいと願うが、できることはほとんどない。そして、ついに花子はどこへとも知れず運び去られてしまう。

黒ずくめの男「実はあなたがおっしゃるような事件はほかでも起こっています。私どもはそれを専門的に調査研究する特務機関の者です。決して怪しい者ではありません（と、名刺を差し出す）」

太郎「（名刺を受け取り）国立機密特別研究所」

黒ずくめの男「略して、キトクケン」

太郎「はあ」

黒ずくめの男「ご協力頂けますか？」

太郎「と言われても、突然のことで、何が何やら——」

黒ずくめの男「協力と申しましても、何も難しいことはありません。奥様を研究所にお運びし、こうなってしまった原因を究明し、解決法を探求する。そのことに、ご同意頂くだけで良いのです」

太郎「妻をどこかに連れていくんですか？」

黒ずくめの男「ええ、そのために、ご家族のご同意が必要なのです」

太郎「妻を、元に戻して頂けるんでしょうか？」

黒ずくめの男「無責任な約束は致しかねますが、最善を尽します」

太郎「……」

黒ずくめの男「これだけはハッキリ申し上げます。このままここに置いていても、何の解決にもなりません」

太郎「そうですね」

黒ずくめの男「私どもは最新の科学的アプローチによって問題を分析し、最新の科学技術を傾注して解決法を探求します。これ以上に確実性の高い手立ては存在しません」

太郎「……わかりました。同意します」

黒ずくめの男「それでは（と、書類とボールペンを出して）こちらの同意書にご住所・お名前・お電話番号をご記入頂けますか？（と、太郎に渡す）」

太郎「（受け取って）ここですね（などと言って記入し、男に返す）」

黒ずくめの男「（受け取って）ご理解ご協力、ありがとうございます。一つだけお願いがあるのですが、よろしいですか？」

太郎「何でしょうか？」

黒ずくめの男「このことは何卒ご内間に願いたいのです」

太郎「どうしてですか？」

黒ずくめの男「人間が機械になるなどという話が広まると、人心を不安に陥れる恐れがあります。無用の混乱を避けるべく、本件事案は最高度の国家機密に指定されているのです」

太郎「（うろたえて）国家機密ですか。でも、もう人に話してしまいましたけど」

黒ずくめの男「どなたにお話しされましたか」

太郎「レンタル・ウォーターサーバーのスタッフの方、大学の先生をされてる方、陰陽師の方、私の両親、妻の両親、この町の往診をしている病院全部、それと警察にも」

黒ずくめの男「それだけですか？」

太郎「はい」

黒ずくめの男「わかりました。私どもの方でしかるべく措置しておきます」

太郎「そうですか」

黒ずくめの男は仲間たちの所に行き、何事か指示する。男たちは花子の周りを取り囲む。

黒ずくめの男「おや、お金を入れたままになっているようですが、どうなさいますか？」

太郎「あ、そうか。そうでした。……せっかくだから買います。何て言うか、しばしの別れの形見に言うか。……何がいいかな。……あ、これがいい。カピルスドライマックス。妻が好きだったんですよ、これ（と、ボタンを押す）」

缶入りのドリンクが取り出し口に落下するガラガラドスンという音がする。

花子「毎度アリガトウゴザイマス。マタノゴ利用ヲオ待チシテオリマス」

太郎は商品取り出し口からドリンクを取り出す。

黒づくめの男「もう、よろしいですか？」

太郎「はい」

黒づくめの男「それでは、失礼します」

黒づくめの男たちは花子を持ち上げて運び去る。

太郎「(去っていく男たちに向かって) 妻を、よろしくお願いします！（と、深々と頭を下げる。

男たちが去った後、花子に語りかけるように）これでよかったんだよね」

太郎はしばらくの間気が抜けたように佇む。

太郎「あ、そうだ。連絡しておかなきゃ（と、スマートフォンを取り出し、懇意にしているレンタル・ウォーターサーバーのスタッフに電話をかける）」

スマートフォンから、機械的な女性の声で「おかけになった電話番号は現在使われておりません。番号をお確かめになって、おかけ直してください」というアナウンスが繰り返し流れる。

こうして、花子が自動販売機になるストーリーは終わりを告げる。しかし、上演はまだ終わらない。

太郎が水銀灯に変容して街角に立つもう一つのストーリーが始まるのである。水銀灯に込めた象徴的な意味は、以下のように表現した。

花子「(太郎の前に大の字に寝そべって、呆然と見上げ) 何かこの感じ、太郎君と私の関係みただな。君の放つ物を、私はこうして受け止める。受け止める。受け止める」

要するに、女が「産む機械」であるとするなら、男は「産ませる機械」にはかならないわけである。

\*

この上演において最も演劇的と言える趣向は、花子役の出演者がただ直立不動であることを、観客に自動販売機であると了解してもらった所であった。そのための手立ては原理的には至極簡単であって、花子以外の役が皆、花子を自動販売機として扱うことである。しかし、単純に「これは自動販売機だ」などと言ってしまうのでは説得力を持ち得ない。もしも実際に人が突然自動販売機になったとしたら、周囲の人々はどのように反応するかという、まさに虚構ならではのリアリティが求められる。筆者は三つの場面をまたぐ形で、その成り行きを描いた。

太郎が二人分のコーヒーを持って戻ってくる。

太郎「(花子を見て) えっ？ 何でこんなものが？」

同じ日の夕方。太郎がスマートフォンを耳に当てて立っている。スマートフォンから呼び出し音が漏れている。間もなく警察官が電話に出る。

警察官「はい。堅井中警察署です」

太郎「あ、もしもし。あ、あの、妻が、行方不明になりまして。家の中はもちろん、家の外も方々

捜したし、妻が立ち回りそうな先には片っ端から連絡してみたんですが、見つからなくて」

警察官「それはご心配ですね。捜索願はもう出されましたか？」

太郎「いえ、交番にはこれから行こうと思ってるんですが」

警察官「ご住所を教えてください、お近くの派出所をご案内致しますよ」

太郎「いや、交番の場所はわかります。そうじゃなくて、その、何て言うか、信じてもらえないかもしれませんが、って言うか、自分でも信じられないんですけど」

警察官「(太郎が言葉を継ぐのを待つが、何も言わないので) どうかありませんか?」

太郎「……こんなことを言うと、頭のおかしい人間と思われるでしょうけど……妻が、その、自動販売機になったとしか思えないんです」

警察官「それでは、ご住所をお教えてください」

太郎「はい?」

警察官「お近くの精神科か心療内科をご紹介します」

太郎「精神科か心療内科で診てもらえるでしょうか、自動販売機になった妻を」

警察官「いえ、そういう意味ではございません」

太郎「やっぱり……じゃあ、結構です」

警察官「そうですか。お役に立てなくて申し訳ございません。それでは失礼致します」

太郎「あっ、ちょ、ちょっと待ってください」

警察官「何でしょうか?」

太郎「どうしても警察の力をお借りしたいんです」

警察官「ですから、捜索願を——」

太郎「いえ、そうじゃなくて、事件かもしれないんです、何か不思議なトリックが使われた」

警察官「どういうことでしょうか?」

太郎「妻と私はリビングでテレビを見ていたんです。それで、ちょっと席を立て、戻ってきたら、もう妻の姿は見えなくて、ちょうど妻のいた所に、自動販売機が一台立っていたんです」

警察官「それは不思議ですね」

太郎「(さすがのように) ですよ。それに、妻の財布もスマホもキーホルダーも家の中に置きっ放しだったんです」

警察官「つまり、こうおっしゃりたいのですね? 奥様がご自分で出て行ったとは思えないと」

太郎「そうです。そうなんです。それなのに、玄関の鍵はかかっていた。玄関だけじゃない。窓も全部施錠したままだったんです」

警察官「つまり、何者かが侵入して奥様を拉致したとも考えにくいと」

太郎「そうです。それに、私が目を離れたのは、ほんのちょっとの間ですし、物音も悲鳴も聞いていません」

警察官「不思議ですね」

太郎「(さすがのように) ですよ。これは何て言うか、いわゆる密室ミステリー——」

警察官「よろしければ、日本推理作家協会の連絡先をご案内致しますでしょうか?」

太郎「えっ? ……いや、結構です」

警察官「そうですか。お役に立てなくて申し訳ございません。それでは失礼致します」

太郎「あっ、ちょ、ちょっと待ってください」

電話を切った後のツーツーという音が聞こえる。

太郎「ちょっと？ もしもし？ もしもし？」

一週間後の日曜日の朝。玄関のチャイムが鳴り響く。

太郎「はあい！」

太郎は小走りで玄関に向かう。その間も、玄関のチャイムの音はせっかちに鳴り続ける。太郎が扉を開けると、工事の音が大きくなり、花子の両親が入ってくる。

太郎「あ、おはようございます」

義母「花子は、花子はいるの？」

太郎「いえ、それが——」

義父「まだ見つからんのかね」

太郎「はあ、まあ——」

花子の両親はズカズカと上がり込んでくる。扉が閉まると、工事の音が再び小さくなる。

義父「(花子を目にして) 何だい、これは」

義母「おやまあ」

太郎「何に見えますか？」

義父「バカ言っちゃいかんよ。自動販売機に決まってるじゃないか」

太郎「……やっぱり」

義父「いったいどうしてこんなものを——」

義母「そんなこと、どうだっていいじゃない。それより、花子よ、花子」

人間が自動販売機になるという非現実的な事態を、出演者が立ち尽くすことによって表現するために、これだけの手数を費やした。ここでの工夫の要は、花子を直接「自動販売機だ」と言うのではなく、花子をめぐる会話の中で間接的に言及することであった。

花子を演じた出演者は、舞台上で長時間ただひたすら直立不動でいなければならないという困難な演技を強いられたわけであるが、視線の動きだけで心情を想像させる等、こまやかな造形で見事に演じ切ってくれた。その対応力の高さに、私は感嘆を禁じ得なかった。